

京都の生協

No. 26

- ひとときトーク——鄭鎮星さん
- 新連載——京都と戦争
- 京都生協が「くらしの研究所」設立へ
- マラソンスピーチレポート

発行/京都府生活協同組合連合会

February ● 1993

〒604 京都市中京区烏丸二条角 西和ビル 6 F
TEL.075-251-1551 FAX.075-251-1555

触る。 視・聴・嗅・味・触、これ五感。

映画、テレビと視覚に訴える手段、
ウォークマンなど歩きながらでも聴くことのできるオーディオ、香水やボプリブーム、グルメブーム…と四感は近年ことさらに発達したよう。が、触感のみが取り残された感あり。そこで白木の肌触りやら和紙、シルク、レザーの肌触りと触覚に訴える文化の提唱が…。自然との触れ合いもまた盛んです。

赤ちゃんに必要なのは、とにかく触れることとか。肌の温もりを感じて赤ちゃんは安心を得ます。直接、肌で触れ合わなくとも、琴線に触れることも。たとえばこんな詩。

春かぜに 花ひらく、かの人の来るらし。
春かぜに 花ぞ散る、かの人の去りゆくらし
(『朝鮮詩集』)

もっとも「万物をつくる者の手を離れるとき、すべてはよいものであるが、人間の手に移り触れるとすべてが悪くなる」(ルソー『エミール』)とか。そうならないよう、五感を鍛え、心豊かにしておきたいものです。



協同組合の組織原理を考え直す



龍谷大学生生活協同組合理事長

中村尚司

福沢諭吉は、会社という言葉を作り、その将来に大きな夢を託していました。百年足らずのうちに、日本の会社は、福沢が夢見た以上に強力な経済組織に成長しました。今では世界に冠たる効率経営を誇っています。しかし、皮肉なことに、その福沢が一万円札に登場した1985年から、日本の会社は衰退への一步を踏みだしました。会社に代わる重要な経済組織は、協同組合以外にないでしょう。わたしたちはそう確信しています。会社が株式の所有比率に応じた支配を原則とするのに対して、協同組合は出資金の大小に関係なく、組合員の自発的な参加によって経営される組織だからです。

協同組合の現状が、だからといって、会社に代わって未来を託すことのできるほど、立派な組織だというわけにはまいません。農協は、食管会計や補助金行政の代行機関になっています。信用金庫や信用組合は、銀行の補完物になっています。各種の産業協同組合は、政府の産業行政に取って最も都合の良い形に組織されています。

私たちの生活協同組合だけが、民主的かつ自主的な組織であると威張れるのでしょうか。私が理事長をつとめている龍谷大学生生活協同組合の経験からいえば、民主的かつ自主的な経済組織でありたいと願っているものの、残念ながら実状はそうなっていません。生協の理事長になりたい、と希望して立候補する人はいません。したがって、所信表明もなければ、選挙戦もありません。他の理事や総代の選出についても同様です。

大学生協の場合、協同組合運動のために生活時間の最も重要な部分を投入している職員層は、理事会のメンバーとして経営に参加することができません。逆に、理事長を始めとするほとんどの理事は、一週間のうち生協のために1、2時間しか費やさない人間です。最も重要な役割を演ずる専務理事は、組合員ではないという意味での員外理事です。

このような請け負い経営体制では、福沢以来の日本的な株式会社に取って代わることは不可能でしょう。なぜこのような経営体制になったのでしょうか。生協の諸事業を実質的に担っている人々が、同時に経営をも担う組織を創るには、どうすればよいのでしょうか。協同組合の時代が始まろうとする今こそ、根本的に考え直すべきではありませんか。 (なかむらひさし)

目次 CONTENTS

- ①ひとときトーク/ ゲスト・鄭 鎮星さん
- ④広げられた協同組の輪/ ICA東京大会と京都でのとりくみ
- ⑥国際医療協同組合代表、中野眼科を訪問
- ⑦『コープパリティ』ができました/ 京都生協検査室、移転拡充
- ⑧龍大生協・大宮福利厚生施設刷新
- ⑨生協開発商品使ってジャンボ巻きずし・あみの生協
- ⑩「くらしの研究所」(仮称)いよいよ発足
- ⑫連載・平和をもとめて
- ⑭毎日続けたマラソンスピーチ、そしてこれから…
- ⑯福祉・障害者団体めぐり/ 京都府視覚障害者協会



いどくす〜く

ゲスト

ソウル・徳成女子大学校副教授

チョン チン スン

鄭鎮星さん

ホスト

京都府生協連会長

木原正雄

語り合ったのは92年12月8日。51年前のこの日、日本は真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争が始まりました。「朝鮮半島には戦前に行ったことがあります、戦後には行っていません。行きづらいんです」と苦い胸中を語る木原正雄会長。今回は来日された鄭鎮星さん（韓国・徳成女子大学校社会学科副教授）と、日本の戦争責任の問題、アジア諸国と日本との関係のあり方について語り合いました。

■日本にしてほしいこと

それはあの戦争の本当の整理

木原 生協は「暮らしを守る」ということで活動しているのですが、そのなかでも一番大きな課題は戦争の問題だと私は考えています。戦争になれば暮らしのすべてが破綻するわけですから……。

今日、12月8日は私にとって忘れえない日です。

そしてアジア諸国への侵略戦争が終わり、こんにちに至ったわけですが、戦後の日本があの戦争に対してどういう態度をとってきたのかということを考えてとき、私は非常に苦い思いです。最近、韓国・朝鮮との関係では強制労働の問題、従軍慰安婦の問題などが言われていますが、日本の戦争犯罪、戦争責任についてきちんと清算していかなければならないと思います。戦争は、どんな理由をつけようと大量殺人でしかなく、日本は中国大陸、その他アジアの国々で、それをやってきました。

そうした戦争の反省の上に、日本社会は新しく出発すべきだと私は考えています。それは生協がめざす「われわれの生活を守る」という点からみても大事なことだと思います。

こういった問題について、今日は鄭先生の立場から、日本はどうあるべきか、あるいはどうあつ

てほしいとお考えか、ひとつ忌憚のないご意見を
うかがいたいと思います。

鄭 大きな問題ですね。私は政府のレベルと市民
のレベルを分けて話したいと思います。

日本の政府としては、何よりもアジアに加えた
被害、つまりあの15年戦争に対して、本当の整理
を行わなければならないと考えます。15年戦争が
何だったのか、戦争で日本はアジアの国々に何を
やったのか、日本国民に対しても何をやったのか、
このことを深く考えて整理し、自己批判や反省を
しなければならないと思います。

そのためにまず私たち韓国人が話したいのは、
本当に何が行われたのか、という真相究明ですね。
日本政府の立場は“できるだけ隠す”というもの

日本にまず望むこと それは真相究明。

です。これは歴史のためにもよくない態度だと思
いますし、あの戦争のような悪いことを未来に繰
り返すことにつながりかねません。それを防ぐた
めにも真相究明が一番重要です。これが本当に行
われたならば、日本は本当の謝罪、反省を自然な
かたちで行うことができると思います。

いま日本は「PKO」ということで、カンボジ
アに自衛隊を送っていますが、その前に戦争に対
する本当の整理——謝罪とか賠償とかを行わな
ければならないと思います。それなしには、日本の
戦争はいまも解決しないままだと思います。

木原 アジアの国々にとって、戦争はまだ終わっ
ていないということですね。本当にその通りだと
思います。

■日本のアジアへの協力のあり方は

鄭 ですから、この状態のままで日本の軍隊を派
兵するのは、アジアの人々にとっては非常に怖い

問題です。

二番目には、日本政府としてはアジアの国々に
協力するということを言っていますが、本当の意
味でアジアの国々に協力するということは何かを
考えてほしいということです。少なくとも、PK
Oで軍隊を送ることが「協力」ではないことは確
かだと考えています。



プロフィール／鄭鎮星(CHIN-SUNG CHUNG)

1953年生まれ。ソウル大学社会学科を経てアメリ
カ・シカゴ大学に学ぶ。1985年よりソウル・徳成
女子大学校社会学科副教授。1989年、東京大学社
会科学研究所で外国人研究員として一年間在籍。

たとえば日本のODAはアジアの国々にたくさん出ていますが、この条件が悪いのです。西洋のODAと性格が違って、日本の企業がくる地域では環境問題が生まれ、住民との関係でいろいろ深刻な問題が出てきています。

またODA返済の利子が高くて、いまこれを返すためにアジアの国々は経済が大変になっています。ですから、日本のODAは本当にアジアの国々に協力するものなのか、日本の利益のためのものなのかという問題があります。

韓国との場合も1965年の日韓条約のあとから日本の機械設備が韓国にやってきて、以来ずっと日本から機械を買わなければならない状態が続いています。私たちは一生懸命働いて、アメリカやヨーロッパへ売ります。そのために日本からいっぱい部品や設備機械を買います。韓国の輸入の80%以上が日本からの輸入なのです。

ですから、本当の意味の経済的な協力が必要です。技術移転、格差の是正の努力が、日本の「協力」として、行われなければならないことだと思います。

木原 経済の問題で言いますと、もう一つ日本人が忘れてならないことは、いま日本は経済大国となっているのですが、その戦後日本の経済の発展が戦争と密接に結びついていることです。まず朝鮮戦争に協力することによって日本経済が復活しました。もう一つはベトナム戦争ですね。日本は平和に発展してきたと言われますが、経済的には実は戦争を契機として発展してきたのです。このことを日本人は忘れてはならないと思います。

■アジアへの偏見根強い日本に対する不信

鄭 市民のレベルで話したいことは、日本人のアジア人に対する意識・態度と西洋人に対する意識・態度が違うということです。アジア人に対する偏見や優越感は、15年戦争のころから変わっていないと思います。

たとえば今の日本社会では、アジアの国々から来る外国人労働者の問題が大きくなっています。日本政府として何もしないまま、不法就労を利用しているとも考えられます。そして日本人のなかにも、アジア人がたくさんきて永住すれば問題だ

という意識、つまりアジア人は危ない、犯罪をするとか考える傾向があると思います。

先週、私が横浜で外国人労働者の問題のシンポジウムに参加したときに聞いた話ですが、「日本の労働市場の状況をみれば結局、外国人労働者を加えなければならないだろう。そのために、外国人労働者一人ひとりの宗教、年齢などを全部コンピュータに入れている」ということでした。

私は一種の衝撃を受けました。アジア人はコントロールしなければならない、という考え方なのですね。日本人もアジア人なのに、アジアになるのはだめという脱アジアの意識が強い。こういう偏見をいかに直すか、これは政府に任せるだけではなく、教育も必要ですし、文化活動や様々な交流活動が必要だと思います。

木原 戦前からつくられた偏見は根強いと思います。しかし考えてみれば、日本の文化は朝鮮半島から渡来してきた人々との共同作業で築かれてきたものです。豆腐などの食べ物ひとつとっても渡来の食文化です。そういうことをしっかりと考え、市民レベルでの率直な対話や偏見をなくしていく文化的交流など、やっと日本人は考えはじめています。

鄭 これも日本に来て、いろんな都市を訪問し驚いたことですが、姉妹都市は全部アメリカやヨーロッパで、韓国にはないんですね。悲しい事実です。かつての日本の15年戦争は「未開なアジア人を解放するために日本が支配する必要がある」という考え方でした。アジア人に対しての偏見が変わらなければ、私はちょっと危ないと考えざるを得ません。

木原 決してすべてが変わっていない、ということではないと思います。変えようと思っている人もたくさんいるのですが、指摘されたことについて、善意の人々も気がついていない、偏見に気がついていないということがあってと思います。これは怖いことです。

鄭 率直に言って、日本人は戦争責任の問題にしても、日本がアジアに与えた被害については少なく、日本人自身が受けた被害のことは多く考えているように思えます。

■人権の問題としてとらえる

鄭 もう一つ市民レベルでお話ししたいことがあります。私がいま会っている日本人はとてもいい人ばかりです。戦争のなかで日本が本当に悪いことをやった、私たちはいま何をすればいいか、というように考えてくれます。そしていいことをやっている団体がたくさんあるという事実も私は知っています。

しかし私たちは心配していることがあります。そういう、いいことをする本当の動機が何か、ということです。多くの日本人はこういう活動をするのが結局は日本社会のためだ、と話しています。「日本社会のため」——これは事実ですね。こういう活動が日本社会のレベルを高めるということとは事実です。

でも、それがアジア人と日本人が西洋人と同じような「人間」だとして、人権問題として考えられていないことに不安を感じるのです。つまり、本当の意味の平和とか人権のためではなく、日本社会のためというのが「動機」なのです。すると、例えばいま日本経済は不況です。日本経済を回復するためには、こういう活動より他のことが必要だ、ということになってしまいます。その方が日本社会のためになると…。

これには苦い経験があります。1930年代にとってもいい日本人たちが韓国人のためにいろんな活動をやり、独立運動も手伝ってくれました。ところが戦争が始まると、「日本社会のためだ」ということで変わってしまったのです。そういう日本社会の歴史があります。

日本人は特に集団主義の傾向があります。社会全体の雰囲気、アジア人のためということを考える余裕がないような段階にきたとき、日本社会のためにこれをしなければならない、と変わってしまうのではないかと考えてしまいます。

現在、従軍慰安婦の問題にしても弁護士とか一生懸命やっています。それはとっても感謝していますが、そういう歴史的経験があるのです。だから、日本のみなさんには、その動機をもう一度考えてほしいと思うのです。

木原 本当にその通りですね。また、いいことだ

と思ってやっていることが、大きな力に悪用されて、結局は動機が歪められてしまうということもあります。おそらくそれは朝鮮半島から見れば、大丈夫だろうかと不安に考えられるのは当然でしょう。いま一番必要なのは最初に言われたように、きちんとした今までの反省、謝罪、賠償。これをまず考えなければならないと思います。

さらに、問題の本質は人権にあるということもまた、その通りです。関西は在日韓国人・朝鮮人の方が非常に多いのですが、戦前から強制労働でこちらに連れてこられ、ちゃんと税金も払っておられる。しかし選挙権も与えられていない。そういう状態が戦後ずーっと続いているわけです。これは非常におかしいと思うのですが、それがおかしいということを日本人が気がついていない。これは在日韓国人・朝鮮人の方々の人権をどう考えているのかという問題だと思います。われわれ日本人自身が深く考えなければならないことです。

鄭 もちろん日本人だけではなく、韓国政府にも韓国人にも問題がたくさんあります。韓国人として教育されたのは「日本人は悪い、悪い」ばかりです（笑）。

木原 こうした問題について、やはり日本と韓国と市民レベルでの率直な意見の交換や、様々な交流が本当に必要なのだと思います。本日はお忙しいところをありがとうございました。

【対談を終えて】

かつての日本と朝鮮とは、帝国主義（大日本帝国）と植民地（朝鮮）という武力による支配・被支配の関係にあり、そのもとで強制連行や従軍慰安婦などの問題が起きました。

これらの問題を解決するためには、このような非人間的な人道に反することが、誰によって、どのようにして行われたのか——戦争の最高責任者は誰であったのか。このことをあいまいにしながらまでは、戦後処理が終わったとは言えません。

口先でいくら「平和」だとか「国際貢献」だとかを言っても、被害を受けたアジアの諸国民から信頼されることはないでしょう。

鄭さんの対談のあとで考えたことを付け加えておきます。（木原）

広げられた協同組合の輪

ICA東京大会と京都でのとりくみ

ICA（国際協同組合同盟）第30回大会は、10月27日から30日まで東京で開催され、1,000名を越す参加者で交流と連帯を深め合い有意義な4日間を終えることができました。

また、京都の生協では東京大会を開催するにあたり、農協、魚協、森林組合の方々と「ICA東京大会準備京都の会」を結成し、前進座による「怒る富士」の公演を始め、10月31日にはポストコン

グレスツアーのメンバーが京都観光のため入洛、夜は歓迎夕食会が開かれ和やかな一時を過ごしました。

そのほか大学生協は、ICA東京大会の関連企画として開催されたユースセミナーのホストとして参加、また国際医療協同組合フォーラムに参加された外国人代表団が新築された京都医療生協の中野眼科医院を訪問しました。



ポストコングレスツアーのメンバーの
歓迎夕食会にて



(10月31日、コープイン京都)

ICAユースセミナーの事務局を担当して

92年10月21日～26日の日程で、大学生協連がホストとなり、第2回ICAユースセミナーが開催されました。セミナーには16ヵ国から46名の参加があり、「平和と環境」をテーマにして参加者の問題意識の交流や、21世紀にむけて協同組合としてどのような役割が発揮できるのかという点を中心に論議されました。

21日～22日はコープイン京都を会場にして、グループ毎に「平和と環境」についての問題解決の方向を「平和と環境の木」を作成することで表現し発表会を行ないました。

23日は広島行動で、原爆資料館の見学や平和公園内の“碑めぐり”のフィールドワークを行なっ

た後、被爆者の沼田鈴子さんから被爆体験の話、広島YMCA国際コミュニティーセンター所長の永井先生より世界的な情勢についての講演を受けました。沼田さんのお話は参加者に強い感銘を与えたようで、目に涙を浮かべた多くの参加者が講演後の沼田さんの回りに集まり、沼田さんをいたわる光景がみられました。

24日～26日は東京に会場を移し、大阪市立大の宮本憲一先生から環境問題に関する講演を受け環境問題の討議を行ない、最終日の26日には「平和と環境」問題での共同声明を作成しました。

今回のセミナーを通じて、参加者はお互いの国の現状を知り協同組合の役割と可能性についてさ

まざまな検討を行ないました。21世紀に向けた協同組合の役割と可能性について参加者は確認を深めたようでした。また、国の違いにかかわらず人と人とお互いを理解し合うことの大切さがあらためて参加者の共通認識となりました。最後に、日本の大学生協からの参加者の感想を紹介して報告のまとめとします。

「確かに言葉の壁はあったけど、理解してほしい、理解したいとみんなが思っていると何時の間にか困難ではなくなりました。『世界の協同組合がもっともっと共同しあえる世界的規模の協同組合をつくっていかう。その時は一緒に活動しよう』と誓い合った参加者のみんなを思い出します。」

(大学生協連関西地連事務局長・南波好孝)



大学生協主催のユースセミナー参加者歓迎会

国際医療協同組合 フォーラム参加者代表

中野眼科を訪問

国際医療協同組合フォーラムに参加した外国代表22人が、10月26日(月)、京都医療生活協同組合の中野眼科医院(千本丸太町角)を訪れました。この国際医療協同組合フォーラムは、ICA東京大会の関連会議として10月22・23の両日、東京で開かれていたものです。これまで医療生協は日本独特のもので、外国にあっては少数のものと思われてきましたが、国際交流が進む中で、16ヵ国にあることが分ってきました。

中野眼科医院を訪れたのはスペイン、スウェーデン、アメリカ、ブラジル、パナマ、マレーシア、インド、スリランカの8ヵ国。ウエルカムのポス

ターと花を飾って6階の会議室を急ごしらえて歓迎会場にしました。中野信夫理事長が歓迎のあいさつを兼ねて、京都医療生協の活動と医療内容を紹介しました。その後診療所の各階の施設を見学して回りました。白内障やアルゴンレーザーによる手術の設備や治療に関心が高く、活発な質問がありました。インドのインディラ・ガンジー協同組合病院から参加したザカリアさんは眼科医なので特に熱心で、診療中の芥川医師をつかまえて眼内レンズ挿入術やその料金についてくわしく説明を聞いていました。

外国代表にくつろいでもらおうと日本茶を出したところ飲めない人が2人もあり、慌てて紅茶を準備する一幕もありました。診療所に来ていた患者さんは、「中野眼科もえらい有名になったもんや」と、暖かく外国代表を迎えていました。

前日の10月25日(日)には、日本生協連医療部会の主催で、国際医療協同組合フォーラム参加者代表・西日本歓迎パーティーが京都国際ホテルで開かれ京都医療生協からも参加、外国代表となごやかな交流が行なわれました。外国代表からは、日本の医療生協が地域や班を中心にすすめている保健予防や健康づくりに取り組む活動をたたえる声がかもごも聞かれました。

(京都医療生活協同組合専務理事・田中 弘)



中野眼科を訪れた代表团

300坪タイプの組合員センター 「コープ パリティー」ができました。

京都生協の組合員センターでは初めての300坪タイプのお店が、西京極に昨年9月24日オープンしました。

充分な品揃えを満たす売り場には、食品中心にお惣菜コーナーも充実され、お買い物だけでなく楽しめるお店としてお年寄りから若い方までの要望を取り入れ、エレベーター、駐車場も完備されています。

環境、リサイクル活動にも積極的でトレイ、空カン、ボトルの回収も実施しています。



コープ パリティー

移転して拡大、充実されました。

京都生協検査室

京都生協検査室が、京都生協本部に拡張移転しました。

これまで出来なかった残留農薬検査を初め微生物検査室、組合員検査室も設けられ検査機能も拡大、広さも以前の検査室に比べて3倍になりました。

組合員検査室では、食品の安全性や川や水道の水質検査ができ組合員に喜ばれています。ご利用の方は、本部組合員室までご連絡下さい。



拡張移転した京都生協検査室

京都生協旅行事業部が誕生しました。

組合員の皆様におなじみの(株)京都文化事業センターが、京都生協の旅行事業として9月21日発足しました。

これまでの代理店業から一般旅行業になり、直接皆さんの要望を受け止めることができそして生かせるようになりました。

お問い合わせ、お申し込みは

京都生協旅行事業部

TEL (075) 672-9111

FAX (075) 662-1002

中野眼科、 新築ビルに移転

京都医療生活協同組合の中野眼科医院が、千本丸太町西南角に新築されたビルに移転し、9月1日オープンしました。今度の建物は地上6階、地下1階のビルで、窓が広くて明るく、どの階から外景色がながめられ、気持ちよく受診できると喜ばれています。これまでの診療所（千本丸太町下る）では、手術などで2階へ行っていただく時は階段のため不便をかけていましたが、今度はエレベーターで各階に行くことができるようになりました。移転を機に診察室のスペースが広げられたのをはじめ、検査機器も一層充実し、一般眼科診療、メガネ・コンタクトレンズ処方から、高度な日帰りの白内障手術や緑内障・網膜疾患のレーザー手術まで、従来通り行われています。

（京都医療生活協同組合専務理事・田中 弘）



新築された京都医療生協 中野眼科

大宮福利厚生施設刷新 —— 龍大生協 ——

龍谷大学発祥の地である大宮キャンパスは重要文化財の本館をはじめレンガ造りの建物が並ぶいかにも文化と歴史を感じさせるキャンパスです。このキャンパスには現在約1,800の学生、院生、教職員が生活していますが、これまでの福利厚生施設は面積も狭く、とても組合員の要望に応えられるものではありませんでした。

キャンパス人口が増加予定であることもあって、昨年の10月に新厚生施設が完成し食堂、喫茶、書籍購買部が一新されました。食堂は250席のキャフェテリア食堂に刷新され、ホールのグレードも大変に高い質をもったものになりました。書籍購買はわずか10坪ほどであったものが60坪の広さとなり、不十分であった品揃えを大幅に改善することができました。また、国内旅行業も開始し、より広範な組合員のニーズに貢献できるようになりました。生協の店舗以外にもすばらしい多目的ホールを備え、学会のパーティーも開催されるようになりま

した。

今後は組合員の声と参加でより品揃えや運営改善をはかり、従来とは比較にならないこの厚生施設を有効活用し、大宮キャンパスの生活をもっと便利で潤いのあるものにしたいと考えています。

（龍谷大学生協同組合専務理事・栗飯原利弘）



改築された龍大宮学舎の生協食堂

生協開発商品使って ジャンボ巻きずし

い・ち・にのさん！生協まつりに参加した組合員48人で21メートルの巻き寿司が巻きあがりました。地元でとれた米、地元でとれた野菜、あみの生協開発商品等を使って巻きました。9年をふりかえり、また、来年十周年に向かって良い事も、悪い事も巻き込もうというわけです。あみの生協では、このほど、実行委員29人で、楽しい生協まつりを開催しました。当日は延べ500人の組合員が参加、更に22メートル、25メートルと長くなるようがんばることを参加者で誓いあいました。なお、あみの生協の組合員は10月末で2,106名になっています。

(あみの生活協同組合生協まつり実行委員長・中村豊美)

あ
み
の
生
協
生
協
まつり



あみの生協まつり “ジャンボ巻きずし”

京教で京響と一緒に第九を歌おう!!



学内講堂を
埋めつくした
聴衆から
あたたかい拍手

「京教で京響と第九を歌おう会」は京都教育大学生協が、京都教育大学の特徴を生かし、これまで希薄だった大学と地域住民の交流を広げようと、学内外に呼びかけ発足しました。

会員募集については、京都生協東ブロックの方々にご協力頂き、歌が好きな主婦の方、会社員、大学周辺にお住まいの方など43人に学生・教職員等を加え総勢70名の全国の大学の中でも珍しい地域の方々との混声合唱団が生まれました。

合唱指導は、教育大学生協理事長で音楽科

の喜多村先生にお願いし、学生サークルの皆さんといっしょに、発声の基礎からのレッスンを6ヵ月間、毎週土曜日に行いました。

12月3日のコンサートは、京都市交響楽団をはじめ、指揮・独唱についても教官や卒業生の友情出演を得て、レッスンの成果を十分に発揮し、学内講堂600席を埋めつくす聴衆のわれる様なあたたかい拍手につつまれ、感動を学内外に広げる企画となりました。

(京都教育大学生生活協同組合専務理事・宮村浩一)

「くらしの研究所」(仮称)

調査・研究の成果を土台に

「くらしの研究所」(仮称)をつくるという構想は、数年前から京都生協で進めてまいりました。その経過を簡単に申しますと、まず、京都生協では、本格的な調査・研究活動の基盤、条件をつくるため、1983年5月調査資料室を設置、9月には関西在住の研究者の協力をえ「生協理論研究会」(座長：野村秀和)を結成しました。

さらに翌84年2月には、「京都の食糧問題を考える会」(座長：鈴木稔)、6月に「地域研究会」(座長：池上惇)を結成するなど、具体的問題を対象にした本格的な研究活動を始めました。その結果は、生協理論研究会の『転換期の生活協同組合』(1986年5月刊)、食糧を考える会による『産直物語』(1987年10月刊)の単行本などにまとめられました。

また、調査資料室は、1988年7月には『京都の暮らしと生協』(月報)を創刊、研究者の協力をえて実施した調査や研究の結果を随時発表してきました。

1989年春には、上記の3つの研究会は合同し、研究体制を強化、1991年1月から2月にかけて「事業と組織」「生活様式」「組合員活動」「新しい領域」

「職員論」の5つのプロジェクトの研究をすすめ、その結果は『生協—21世紀への挑戦』(単行本、1992年10月刊)にまとめ(英訳版も刊行予定)、国際的にもその成否を問うことになりました。

広く研究者と組合員の協力を

このような調査、研究活動を背景にし、1989年5月京都生協は「くらしの研究所」(仮称)設立の準備を開始するという基本方針を決定し、研究所の「設立検討委員会」を設置しました。1990年1月「設立検討委員会」の答申にもとずき、6月には研究所設立推進委員会を発足させ、研究所設立のための具体的な検討に入り、研究所の形態、内容(活動)、資金などの問題について検討してまいりました。この間、日生協、コープこうべ、その他とくに関西、中四国その他の生協や研究者の皆さんのご協力をえ、1992年11月「くらしの研究所」(仮称)設立のための第1回呼びかけ人の会を開くことができ、正式発足(1993年6月予定)を目指し第1歩を踏み出すことができました。

この間、1992年4月合同研究会は、生協総合研究所のご支援をえ、「生協は21世紀を担えるか」と



(11月22日、京都松ヶ崎会館)

いよいよ発足 1993年6月予定



(11月22日、京都松ヶ崎会館)

題するシンポジウムを開催しました。このような取り組みも、研究者の研究成果を生活協同組合とその運動のみならず、その他の各協同組合の運動や事業のなかに反映させ、協同組合の発展にすこしも役立てることはできないかと考えてのことです。

さいごに、研究所の設立と運営は、多額の資金が必要であります。また、くらしの問題に関係のある大量生産・大量物流・大量消費を可能にした技術発展の問題、その結果各種廃棄物などによる

公害や環境破壊、高齢者・障害者問題などの解決は、社会科学のみならず、医学、工業など自然科学分野の研究者、各生協、組合員の皆さん方の協力なくしては不可能であります。皆さん方の一層の物的・精神的ご支援を切にお願いし、「くらしの研究所」(仮称) 設立に関する報告とさせていただきます。(1993.1)

(京都府生協連会長・「くらしの研究所」設立推進委員会委員長・木原正雄)



(11月23日、立命館大学)

自衛隊大久保駐屯地とその周辺

「冷戦時代」の終結で世界情勢は急変し、民族、地域紛争があちこちで起こり、その解決にあたるという名目で国連維持軍が送りこまれました。

また、日本でも昨年PKO法が制定され、カンボジアへ向け京都の大久保基地より自衛隊員が派兵されました。戦争放棄をうたった憲法第九条を否定する自衛隊の派兵は、平和活動に携わってきた私達に衝撃を与えるとともに、これまでの活動を再検討する機会にもなりました。

そこで、世界と日本の歴史に学びこれまでの戦争の教訓にも触れながら、また被害者国から見た日本を通して、これからの私達の役割を考えていきたいと思います。

「特攻隊」訓練基地として

私はいま近鉄「大久保」で乗り降りする地に住んでいます。我が「大久保」は、昨今全国的に有名になりました。それは「PKO派遣」第一番部隊の駐屯地としてですから、あまり喜ばしいことではありません。

ここで少し、自衛隊大久保駐屯地と、その周辺の「京都飛行場」及び「特攻隊」の訓練基地の歴史を述べ、その教訓に学ぼうと思います。

京都から国道1号線を南下し、宇治川を渡り二つ目の信号（森）あたりから、田園風景は消えて工場地帯となります。この辺から、かつての「京都飛行場」跡の工場地帯化なのです。この交差点付近が、東西の滑走路の中心を横切っていることとなります。現国道1号線は京都飛行場跡のやや西寄りを、ほぼ南北に貫いて走っているのです。約半世紀前のことです。

この飛行場は1939年（昭和14）から工事が始められ、民間機のパイロット養成が主目的でした。従ってここに創立したのは「通信省京都航空機乗

員養成所」（京航）で、操縦士と整備士の養成を主眼として、14歳以上の少年を集めて1942年4月開所しました。この「京航」は全てが陸軍式でした。教官は陸軍の軍人、訓練も生活様式も、部品等の呼び名も陸軍航空隊そのものでした。それでも第二次世界大戦の苦戦の連続が反映して、この「京航」は開所後2年余で「陸軍特攻隊」の促成訓練所に乗っ取られてしまいました。そして、1944年4月になると、九州の「太刀洗^{たちあらい}陸軍飛行学校京都教育隊」が併設され、その年の8月に「京航」は閉所の運命をたどり、廃校となりました。「京航」は生徒を他校へ分散させたり、一部は軍人に編入されたりしました。このわずかの間にでも、400余名のパイロットの卵を育てました。「京都教育隊」に変わってからは、陸軍「特別攻撃隊」の「501」と「541」部隊が編成され、その訓練飛行場となりました。

「特攻隊」員とは、自分の青春と命を天皇に捧げた20才前後の若者達です。自らの命を捨て、敵艦に「体当たり自爆」を成功させるための猛訓練を繰り返した「命の捨て場」だったのです。人間が人間を否定することを「悠久の大義に生きる」事だと教えられ、祖国日本のために死する事が「親



自衛隊大久保駐屯地(右上は自衛隊員官舎)

に孝に、天皇に忠」になるのだと信じ込まされ、命を捨てる恐ろしさを忘れさせるための猛訓練の飛行場だったのです。ここはまさに「戦争と平和」の歴史の教訓を学び伝える場として、忘れることがあってはならない「戦争遺跡」なのです。



左上の高さまで土があったが削り取られ
京都飛行場へ運ばれた

「ウトロ」集落のこと

国道1号線を南下する時、右手に運動公園が見えます。この辺りに「京航」の学校、寄宿舎、格納庫、整備工場等が集中した中心部分がありました。いまはNTTの総合運動場になっていますが、その門を入ったところに「京航」の歴史を記した記念碑が建っています。機会があれば一度見てください。碑には廃校の理由を「激動する時代の余波を受け」と刻まれ、陸軍特攻隊に占領された悔しさをにじませています。もう一つの滑走路は、ここから東に当たる久御山高校の西側に、ほぼ南北に造られていました。

京都飛行場の東に「日本国際航空工業」KKが、京都府の肝いりで建設され、飛行機の製造に励みました。いまの自衛隊と日産車体です。ですから当時は、近鉄線から国道1号線の西側までの一帯が、大軍事地帯と化けたのです。道路も川も付替るほどの広大で緊急な工事でした。その工事は、付近の農村の労働力だけでは不足しました。そこで多くの朝鮮人労働者を集め、未造成地の一角の粗末な飯場に住まわせました。1943年（昭和18）頃になると一応の生産体制も整い、飛行機の生産は開始されました。けれども土木工事はまだまだ続きました。1945年の敗戦後に軍も会社も解散しましたが、無責任にも、集めた朝鮮人労働者はそのまま置き去りにしました。全くひどい話ですが



事実です。いま「ウトロ」と呼ばれている集落です。そして半世紀後の今日になって「土地を返せ」「時価で買い取れ」とは。日本政府や造成工事をさせた京都府が、戦争責任や戦後保障などは全く考えもしない無責任さは、今でも罪を問われて然るべきです。電気も水道も近年まで放ったらかしでした。ここにも「戦争の傷跡」が深く刻まれ、無残に残っています。日本がアジアの国々に、国際貢献を幾ら言おうとも疑われるのは、これを解決しないからです。こんなにも心すべき歴史の教訓が、「大久保」近辺には漂っています。今に到るものです。

二度目となる「タケオ」駐留

そのみならず、カンボジアに大久保自衛隊が駐屯する「タケオ」基地こそ、かつての日本軍の「飛行場」跡です。「大東亜共栄圏」を造るための飛行場でした。日本の多くのマスコミの報道が、「日本軍」を削って旧飛行場跡だけを伝えているのは、誰への配慮でしょうか。ですから「タケオ」への駐留は、アジア侵略時代と合わせ、二回目となる訳です。「前者の轍を踏む」事にならぬかと心配するのは、私だけでしょうか。或は、杞憂に過ぎぬといえるのでしょうか。



(平和のための京都の戦争展
事務局次長・池田一郎)

毎日続けたマラソンスピーチ、 そしてこれから……

毎朝、希望へのメッセージ

昨年(1992年)の12月31日、朝8時30分、京都駅前に太鼓の音が鳴り響き、200人以上の人々が、一年間の完走を喜び合いました。

この様子はテレビ、ラジオ、新聞で報道され、郷里や遠くは海外で目にした方も多く、年が明けてから意外な方に「ご苦労さん」と声を掛けられることが在りました。

当初、「本当に続くのだろうか」と完走を危ぶむ声もあり、途中では、「まだやっているの、大変ですわね」と驚きと励ましの言葉を掛けられることが多かったことを思い出します。

1月1日にスタートし、雨の日も、寒い日も、もちろん汗ばむ季節も『「国連・障害者の10年」最終年366日マラソンスピーチ』は毎朝8時30分、京都駅前で希望へのメッセージを発し続けました。

一年間を通して、マイクを手にした人は500人を超え、配布されたチラシは数万枚に及び、スタッフとして支えた人、テープ起しに参加した人、駅前で耳を傾けた人、募金に応じた人を合わせると、何千人、何万人にもなるという一大キャンペーンであったといえます。そして京都にとどまらず全国各地からも、外国からも協力が寄せられ、予想をはるかに上回る大きな広がりを生み出したといえるでしょう。

同じ社会を生きる人として

366日のスピーチを振り返ると、まず障害者にとって、障害があるという事実は、その障害の種別や程度にかかわらず生きていくことへの困難を背負っているのだということ。そして、政治の貧困、制度や施策の不備、社会の無理解と偏見によって、障害者にさせられているのだという事が明らかにされました。

一方このような現実の中でも、人としての権利

が保障される社会をめざして、毎日を力強く生きる障害者や家族の姿も浮き彫りにされました。

障害者が自らのことばで語り、当たり前の望みを権利として勇気を持って主張した事は、なにもものにも代えがたいマラソンスピーチ366の財産となり、私たちの胸に深く刻まれました。

また、障害者施設や病院、自治体で働く人達は、弱者切り捨て構造の中で、少しでも良い仕事をしたいと念じながらも、人員が補充されれば、設備が良くなれば、運営補助金が増えれば、もっともって障害者や家族の思いに応えることができるのにとジレンマを語りました。そして、法廷で、議会で、教室で、障害者施策の充実を求め、人間発達への営みを続けている努力も多く語られました。

毎日の生活の中で感じたことや体験を話した人達も多く、日頃は障害者問題とは無縁の生活に見えるけれど、あちこちに見え隠れする事柄を通して「知ること」の大切さや、ちょっとしたふれ合いを通してお互いが理解できること、個人の努力では解決できないことが一杯あるけれど、一人一人が障害者問題を身近に感じていくことがその始まりであることも語られました。

366日間、個人の責任において語られた体験や考え方は、障害者種別の障害のあるなし、年齢、地域、国籍を超えて障害者問題の本質を浮き彫りにするものでした。

援助する側とされる側とを区別するのではなく、必要な社会的援助を求めつつ、同じ社会を生きる人として、解決可能な事柄に果敢に挑戦していくことが求められていることを学びました。

引き継がれる“問いかけ”

くしくも1993年は「アジア・太平洋障害者の10年」の最初の年に当たります。今年の1月1日から、マラソンスピーチラウンド2として共同作業所の人達が中心となって「……なるまでは」と銘

打って、障害者問題の理解を更に広げ、市内に法人認可の作業所を建設する目的を掲げ、マラソンスピーチ366はマラソンスピーチ365に引き継がれました。

「障害者をしめだす社会は、弱くてもろい社会である」といわれています。一日一日の積み重ねで築いてきた私たちの財産を、更に太らせ大きな実をつけ、花咲かすために、事実と多くの問題提起を社会に問う事がこれからの私たちに課せられた仕事だと考えます。

そして、人を切り捨てる社会を求めるのではなく、すべての人が社会の主人公として命を輝かせることができる社会をめざしこれからも引き続き、力を合わせていきたいと思っています。

○なお、マラソンスピーチ366で話されたすべてのスピーチは『きこえてますか』（1,800円A5判、かもがわ出版）として四月上旬発行予定です。ご予約お申し込みは、京都府生協連マラソンスピーチ係りまでご連絡下さい。

（マラソンスピーチ366事務局長・池添素）



すっかり顔なじみになった京都駅バス停の清掃係の高木さんと筆者

井上吉郎専務理事の辞任について

京都府生活協同組合連合会は、2月5日、井上吉郎専務理事の辞任について、つぎのような「会長談話」を発表しました。

本日2月5日、京都府生活協同組合連合会は、井上吉郎専務理事の辞任を確認した。

これは、これまでに「市民本位の民主市政をすすめる会」や京都総評などの諸団体から、「この8月実施の京都市長選挙にあたって井上吉郎専務理事が出馬するように」との要請をあいっついで受けるなかで、井上吉郎専務理事が「市民本位の京都市政を実現するために、一身をささげるべきだ」と決意し、「任期半ばながら専務理事の職を辞したい」と申し出たのをうけて、本日、京都府生活協同組合連合会の理事会において、その辞任を確認したものである。

井上吉郎専務理事が、1986年4月28日に開催された京都府生協連第33回通常総会において専務理事に選任されて以来、京都府生協連の運営



の要として果たしてきた役割はきわめて大きく、その辞任を認めることは京都府生協連の今後の運営にとってあまりにも手痛いことであるが、この際、その意志を尊重することにした。

なお、京都市長選挙にあたっては、京都府生協連は、従来どおり、組織として特定の候補者の支持決定を行なわない。同時に、生協組員・役職員の選挙活動や政治活動の自由を全面的に保障する立場であることもこの際あらためて強調しておきたい。

1993年2月5日

京都府生活協同組合連合会
会長理事 木原 正雄

共に未来を切り開く仲間作りをめざして

京都府視覚障害者協会

昨年の『国連・障害者の10年』最終年には、マラソンスピーチをはじめ、障害者が人間としてあたりまえに生きていける社会を求め数多くの行動が展開されました。このとりくみを1年間だけで終わらせないために、マラソンスピーチに参加された障害者団体の方々に、これからの展望や要望そして生協に対する注文など、順次お話ししていただこうと思います。第1回は京都府視覚障害者協会です。



昨年1年間、366日マラソンスピーチのお世話をしていただき、本当にご苦労さまでした。

私たちも、3月から12月にかけて、視覚障害者の立場から10回のスピーチをさせていただく機会を得て、大変感謝しております。

さて、昨年で「国連・障害者の10年」は終了しましたが、今年から新たに、「アジア・太平洋障害者の10年」が始まろうとしています。

特に、盲人ガイドヘルパー派遣制度をはじめとする介護サービスの充実、駅ホームにおける安全対策など住みよい街づくり、パソコン等最新科学・技術を利用した情報サービスの拡充及び雇用促進対策など、早急に改善しなければならない課題の解決に向けて、本会として全力を尽くしてまいります。

そして、視覚障害者一人ひとりが基本的人権をきちんと保障される社会を築くために、広範な府・市民と共に、運動を展開してまいりますので、引き続き、ご支援・ご協力の程よろしく願いたします。

ところで、最近、視覚障害者の中で、生活協同組合を利用している人も増えて来ており、そのような人たちから上がっている要望を最後に書かせていただきますので、ご検討いただき、改善できる所から実施に移していただきますよう、お願いいたします。

- (1). 商品カタログをテープ化して欲しい。
- (2). 生鮮食料品など、取扱商品数を増やし、日常的には生協で全て賄えるようにして欲しい。
- (3). 個人加入を認めていただき、電話注文や自宅配達をして欲しい。
- (4). 決まった商品については、商品番号を固定して欲しい（豆腐・揚げ・こんにゃくなど）。

（総務部長・渡部昭一）

京都府視覚障害者協会

所在地 京都市北区紫野花ノ坊町11
京都ライトハウス内
(TEL 075-462-2414)
代表 谷口 幾夫

●気になるこの本

野村秀和 編

『生協21世紀への挑戦 —日本型モデルの実験—』

(大月書店刊 1,800円)

名古屋勤労市民生活協同組合
総合企画室次長

橋本吉広

最近、期せずして複数の生協トップが“何のための生協か”という問いを発する場面に出くわしました。それは、6年前に著された『転換期の生活協同組合』がつげた生協運動の転換がいま本格的に進行し、その過程でここ20年来の生協運動のリーダーたちが、着手し始めた実践について“それは何のために”と問うたもののように思われます。

本書が指摘する今日の生協運動の中に生まれた「生協像のゆらぎ」(P.147)への問いかけともとれるこの事態を前にし、野村秀和先生を編者に京都の研究者による共同研究の成果として刊行された『生協21世紀への挑戦』は、「日本型モデルの実験」という仮説を提示し、この「何のために」の問いに答えようとしています。

本書とほぼ時を同じくして「生活者の価値意識、消費社会の変化、産業社会の方向性をトータルに捉える」(堤清二)として『生活総合産業論』(セゾンコーポレーション編、リプロポート)が著された動機とも、その根底においてつながるものを感じるわけで、まさしく「変化」の時代にふさわしい現代社会に関する問題提起の書が、生協論という形で生まれたといえましょう。

では、『生協21世紀への挑戦』が提起する21世紀展望とは、何か。それは、「21世紀に向けての協同のシステム実現」として端的に表現されます。本書の結論にあたる結章は、「消費者サイドからの価値観にもとづいて、生産にたいする計画や指示が行われる協同システム」を説き、その最終消費者の組織である生協が地域における

多数派形成に成功することが、このシステム実現の「第一歩」であると主張します。この結章にむけて、第1章の日本型生協運動の分析から、ライフスタイル論・生協事業論・経営管理論・参加運営論・生協職員論にいたる各章が、現状分析に立った政策論を組み立てていく役割を負っています。

読後の感想としては、提起された21世紀へのロマンの大きさにむかって、現状からの距離を埋める議論の方向がより慎重に設定される必要を感じます(例えば、事業の多重性をめぐる議論)。さらに、立ち帰ってこの消費者主導ともいえる「協同システム」構想そのものを確認するためには、より総合的な議論がおこることが必要となるでしょう。全体として、読みやすさを重視した編集意図が貫かれ簡潔な議論となっていることが、逆にもう少し議論を展開して欲しいとの恨みを残しています。が、そうであるからこそ、この書は読んでおしまいではなく、議論の始まりに位置する書として大いに活用すべきだと考え、今後も積極的に議論に参加させていただけたらと思っています。



『きこえてますか』

—マラソンスピーチ366の記録—

(予価 1,800円)

1992年、「国連・障害者の10年」最終年にあたってとりくまれたマラソンスピーチは多くの人に感動をひろげました。その全記録が一冊の本にまとめられました。



4月出版

発行

かもがわ出版

☎075-432-2868

93アースデーのつどい

とき 1993年4月22日(木)
午後1時30分

ところ コープ・イン・京都
☎075-256-6600

講演 「自然の鼓動を聞く
——雪、そして森」

高田 宏 (作家)さん

ミニ・コンサート

室内楽 レ・シルフィードのみなさん

主催

レイチェル・カーソン日本協会

☎06-941-3745

後援

アース基金協会

参加費500円

連絡先 京都消団連 ☎075-251-1001

マラソンスピーチのつどい

とき 1993年4月10日(土)午後1時30分

ところ 喫茶「ハイドン」(丸太町小川西入)

●「きこえてますか」出版を祝い ☎231-4112
マラソンスピーチ365の100日目に
あたっての交流。

連絡先 京都府生協連 ☎075-251-1551

生協平和ゼミナール

受講者募集中

立命館大学国際平和ミュージアムの
協力をえて「戦争と平和」について
学ぶゼミナールです。

●定員 30名 <5月開講予定>

連絡先 京都府生協連 ☎075-251-1551